
ラブレター

真浦塚真也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラブレター

【Nコード】
N4082E

【作者名】
真浦塚真也

【あらすじ】
未熟な男の初めてのラブレター作成にまつわる短いお話。

「言葉にするのも恥ずかしくて、でも言葉にしたいくて、でも面と向かって言うのは恥ずかしくて、でもちゃんと言いたくて、だからこういう形で失礼します。」

こういうことすると、きつと君は『明日は雪でも降るんじゃないの?』ってちゃちゃを入れるんだろうけど。まあ、自分でもそう思っちゃうくらい珍しい事なんだけど。例えて言えば君が一度も失敗せずにおいしいシフォンケーキを焼き上げることくらい珍しい事』ここまで書いて、僕は消しゴムを手に取って擦り始めた。でも、『焼き』まで消してから、『まあ、こんな文章も自分らしいかな。』と思い直して再びシャーペン握った。

「焼き上げることくらい珍しい事なんだけど。ごめん。そんな珍しいことじゃなかったね。君の作るシフォンケーキはいつもおいしいもんね。」

こんなフォローを入れちゃうトコも僕らしい文章なのだろうか。

僕は僕自身に苦笑しながらシャーペンを走らせる。

「ちよつと脱線しちゃったね。ここらで本題に入ります。」

僕はこの文章から分かれるとおり、気が弱くて、情けなくて、優柔不断で、ルックスも良くなって、ファッションにも気を遣ったことがない男で。まあ、いつも会ってるから君はよく分かると思うけど。手紙の前で、『うん、うん、よく分かっている。』と頷いてそうだけだ。

そんな僕と、彼女として付き合ってくれてるのが君で、その彼氏がこんな僕なわけで。本当に、君は僕なんかとは不釣り合いなくらい素敵な人で、周りの人から見れば、『何でこんな奴と付き合ってるの?もったいない!』って思われてそう。君から言わせれば『あなたは可哀想でほんとけない人だから。』なんだそうだけだ。

そんなこと含めて僕は本当に幸せものなわけで。」

なんで人間って文字に起こすとこんなに歪な文章になってしまうのだろう。いや、こんなにひどいのは僕くらいになのかもしれない。僕はまた僕に苦笑しながらシャーペンを走らせる。

「とにかく君は素敵な人だってことなんだ。

君の作る料理はとてもおいしくて、まあ焦げたり、信じられないくらいしょっぱかったり、甘かったりする日もよくあるけど。」

こんなこと書くとまた君に怒られそうだけどな。

「君は本当に綺麗で、まあ、泣いてるときや怒ったときは見ちゃいられないくらいひどいけど。」

あゝ、こりゃ君に怒鳴られるな。

「何よりも、君は僕のことを愛してくれた。」

これで機嫌直してくれるかな。

「僕はいつもそうだったものを受け取る立場に勝手に位置してて、君に与えるものなんてせいぜい誕生日プレゼントとクリスマスプレゼントとホワイトデーのお返しくらいなものだけだ。だから、今回は僕発信で伝えようと思うんだ。君に伝わるかどうかは不安だけど。ちゃんと書けるかどうか分かんないけど。

ちゃんと言いたかったから。恥ずかしいけど、ちゃんと言いたかったから。だから書きます。」

ここまで書いて、僕は大きく深呼吸した。やっと辿り着いた。たった二言三言のにできるかぎりの遠回りをしてしまったようだ。傍から見れば、でぶつちよな僕が汗をだらだら掻きながら紙に向かって真剣勝負を挑んでる姿なんて、ただの笑いのネタだろう。

でも、僕は本当に真剣に伝えたと決めたんだ。

僕はまた大きく深呼吸をして、いつもの口癖の『うだけど』のつかない文章を、いつもの倍ぐらいの時間と、いつもの10倍ぐらいの集中力を使って書き記した。

「ありがとう。」

僕も君が大好きです。」

『愛してます』は、恥ずかしくて、『大好きです』にしてみました。書き終わった後に、最後の最後まで自分らしいのだなあと思わず声を出して笑ってしまった。

初めてラブレターを書いた。まあ、他人からすればラブレターとは言えない代物なのかもしれないのだけど。

でも、ちゃんと僕の気持ちはこのラブレターに書き写した。僕発信の意思表示だ。僕発信のメッセージだ。

このラブレターを君に渡すかどうかは分からない。でも、思いだけは伝えるつもりだ。

僕は、シャーペンを置いて、ラブレターの隣にある箱を手取る。箱の中身は、昔から言われていることをそのまま信じて、給料3カ月分相当のものにした。僕の給料だったから、そんなにいいものは買えなかったけど。

僕は箱の中身を確認してまた大きく深呼吸をした。明日、勝負に出るつもりだ。自信ははつきりいってあまり無い。もしかしたら、君に冗談だと思われて受け流されてしまうかもしれない。

でも、僕は明日、勝負に出る。その時は、いつもの口癖が出ないように心がけよう。その時は、ラブレターに書いた僕のありのままの気持ちを伝えよう。

「僕は君が大好きです。」

「僕は君を愛してます。」

（後書き）

御覧頂きありがとうございます。もし、よろしかったら評価をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4082e/>

ラブレター

2010年10月24日01時46分発行